

# 「生き方・価値観」を創造する21世紀学習 —随筆教材「字のないはがき」(中学二年)を例に—

佐藤 洋一\* 有田 弘樹\*\*

\*教職実践講座

\*\*愛知県春日井市立松原中学校

## The Study of the Twenty-First Century to Create “Pupil’s Way of Life and Values” in Their Life —A Study on a Teaching Material of Essay “Jinonaihagaki” (for Second-Year Students in Junior High School)—

Yoichi SATO\* and Hiroki ARITA\*\*

\*Graduate School of Practitioners in Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

\*\*Matsubara Junior High School, Kasugai 486-0803, Japan

### 一 はじめに

#### 1. 「21世紀型能力」と求められる授業開発の視点

次期学習指導要領・教育課程編成のための基準となる資質・能力観、学力・評価観が「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会—論点整理—」(文部科学省・検討会)として提示された。またこれらを具体化した内容が「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」(国立教育政策研究所)の中で「21世紀型能力」(試案)として提案されている(注1・2)。

「21世紀を生き抜く力をもった市民」としての日本人を育成していくためには、各教科・領域等における授業・教材開発、21世紀型の学習デザイン・評価論、学校カリキュラム論、学習理論等も、こうした観点を考慮しながら分析・考察、提案していく必要があると思われる(傍線は稿者、以下同じ)。

#### 2. 「21世紀型能力」とテキスト形式を生かす授業開発

本稿は、「21世紀型能力(試案)」を踏まえ、これからの時代に求められる資質・能力(「自立・協働・創造」的な学力)を育成する観点から、随筆教材における国語科授業モデル開発を例に、実践的に論ずるものである。

特に、随筆教材の「テキスト(表現)形式」の解明により随筆の「習得・活用」とは何がどうなることか、今後求められる資質・能力(21世紀型能力、自立・協働・創造的な学力)を育成するための授業改善・提案を行う。

### 二 これからの時代に求められる21世紀学習

#### 1. 次期学習指導要領に期待される枠組み・構造とは?

「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会—論点整理—」(同左)の提言では、次期学習指導要領の構造を「①『児童生徒に育成すべき資質・能力』を明確化した上で、②そのために各教科等でどのような教育目標・内容を扱うべきか、③資質・能力の育成の状況を適切に把握し、指導の改善を図るための学習評価はどうあるべきか、といった視点から見直すこと」の必要性が語られている(注1)。

これら提言の背後には、世界的潮流としてのコンピテンシー概念や海外各国の教育課程改革動向(OECDの「キー・コンピテンシー」やアメリカを中心とした「21世紀型スキル」等)を踏まえていることが重要である。21世紀型の学び・能力、授業の在り方を考えるとき、海外各国の資質・能力論の動向・分析や「21世紀型能力(試案)」を踏まえた「資質・能力」(教育課程全体の目標)の検討・開発と、これらを結びつけた各教科・領域等の教育目標・内容、方法、評価の構造化(各教科・領域等や生活の自律につながる横断的・汎用的なカリキュラム開発研究)の視点が必要である。

#### 2. 「21世紀型能力(試案)」とは何か?

「21世紀型能力(試案)」は、「『21世紀を生き抜く力をもった市民』としての日本人に求められる能力」と位置付けられ、最終的には「自立・協働・創造を軸とした生涯学習社会の実現」を目指すものとされている。さらに「『生きる力』としての知・徳・体を構成する様々な資質能力から、特に教科・領域横断的に学習す

ることが求められる能力を汎用的能力として抽出し、それらを『基礎』『思考』『実践』の観点で再構成したもの」と述べられている(注2)。その実現方法は、「21世紀型能力」の中核に「思考力」(様々な課題を解決するための中核となる能力)を位置付け、それを支える「基礎力」(教科・領域横断的に求められる基本的な能力)、思考力の使い方を方向づける「実践力」(学んだ知識と思考力を実生活・実社会で活用し、問題解決していくための能力)という三層構造で推進している。

こうした背景には、これまでの「生きる力」理念を具体化した「資質・能力」の基盤である「社会の変化に対応するだけでなく、新たな価値を創り出して生きる人間の育成」があり、これは「一人一人の自立した個人が多様な個性・能力を生かし、他者と協働しながら新たな価値を創造していくことができる柔軟な社会を目指す」(「第二期教育振興基本計画」2013年6月閣議決定)ことにつながるものである。

### 3. 「21世紀型能力(試案)」育成と今日的教育課題

「21世紀型能力」と「学力の三要素」の関係については、以下のように述べられている(注2)。

- (1) 学力の三要素は、「『知識』、『能力』、『態度(資質)』」で構成されており、特に「活用力」は「21世紀型能力における『思考力』」と一致していること。
- (2) 現行学習指導要領が求める能力の構造は、「基盤となる言語に関する能力の上に、…課題解決のための能力の育成が求められる」ものであること。
- (3) 一方、態度や意欲等の情意面は「『能力』の育成に関係が深い資質や価値を『実践力』として構造化し位置付けることで、「学んだことを価値づけ」たり「生活(社会)における意味ある行為へつなげ」たりすることを意識していること。

21世紀型能力とそのための授業・学力モデルの開発と実践化を考えると、上記(1)～(3)にかかわるような「習得・活用型学力」を明確にした授業開発と評価観、「言語活動」の開発と評価における実践的課題や混乱、教科・学校全体のカリキュラム開発、各教科における系統的・段階的な指導過程論や教育技術・指導方法の再考と実践的提案といった今日的教育課題の検討・克服が必要なのではないか(注3)。

## 三 随筆教材の「テキスト形式」を生かす授業開発の視点

### 1. 随筆教材の実態と指導上の課題・混乱とは？

これまで随筆は中学・高校教材としてしばしば取り上げられてきたジャンル(テキスト形式)の一つである。現在では小学校でも小学校高学年で教材化され、「枕草子」や「徒然草」、「方丈記」等の古文教材を含めたりするとかなりの数になる。背景には、随筆を創

作・評価(批評)する学力の育成が現行学習指導要領(国語科)で新しく位置付けられたことがある(注4)。

随筆を読む(書く)ことで、身近な出来事や経験等をふり返り、感性や発想・認識の変化(成長)に気が付き深めさせる指導観、自由に読み取ったことをまとめさせる指導観が、現行の国語教科書(指導書)・学習の手引き等で見受けられる。しかし、随筆教材の持つ「自由な形式？」がかえって身に付けさせる学力観や指導観・評価観を曖昧にしてきたと言えるのではないか(注5)。

### 2. 「活用型テキスト」としての随筆教材

随筆とは、見慣れた日常や何気ない経験・社会の出来事等の中から、作者(筆者)独自の感性や認識、考察・判断等を自由な形式で語った「短い文章や断章」といった捉え方が一般的である。そこで書かれる文章は、基本的には論理的な形式を持ちながら、自然現象や現実・人間関係等への「発見と認識・批評」が独特の語りや文体、工夫された形式で書かれることが多い。

随筆は、文学的文章と論理的文章の二つのテキスト(表現)形式を合わせ持った「活用型テキスト」ということができる。それは、基本的には論理的な構造(報告や論文型の基本的構成や枠組み)を持ちながら、一方で作者(筆者)らしい「発見と認識・批評」をエピソードの選択と場面構成、個性的な描写や象徴的イメージ等の文学的な独特の表現で語られる特質があるためである。さらに随筆には小説家や詩人・評論家等による「文学的随筆」(向田邦子や大岡信、清少納言等)と、物理学者や数学者・科学者等による「論理的(科学的)随筆」(寺田寅彦や中谷宇吉郎等)に分けることができる。

文学的随筆と論理的(科学的)随筆という二つのテキスト形式を生かした「学び方」の指導は、現実や現象・人間関係等を個性的な感性と論理性によって捉え、発信する「言語力」とともに「批評的・創造的なりテラシー」(思考力・実践力)も身に付けさせることにつながっていくはずである(詳細は注6を参照)。

### 3. テキスト形式を生かした随筆教材の「学び方」

限られた時間数の中で、全員子ども達に随筆を読み解き書かせ、それらを評価・批評させるためには、随筆のテキスト形式を生かした「習得・活用型」授業モデルの開発が必要である。随筆のテキスト形式を踏まえ随筆教材で身に付けさせる学力観を整理すると、以下①～⑩のポイントをあげることができる。こうした観点を系統的・段階的に提示することで、生徒達は他の随筆教材や古文教材に応用・一般化したり、実生活での豊かな読書活動に生かしたりできると考えている。(詳細は「五」、注6を参照)。

- (1) 作者(筆者)の主張・メッセージがわかる。
- (2) その主張・メッセージの前提になっている「常識的な考え方・時代的な価値観」がわかる。

- (3) 論理的な文章（場面）構成の「型」の応用と工夫がわかる。
- (4) 選ばれたエピソードの数と内容、順序の効果がわかる。
- (5) 優れた表現やものの見方、そのための工夫がわかる。
- (6) 自分の立場や興味・関心、生活経験等から「自分の考え・解釈」を持てる。
- (7) 随筆教材のモデル（型）を生かして随筆をまとめる（創作する）ことができる。
- (8) まとめられた随筆の良さや特色、改善等（批評）の視点を持つことができる。
- (9) 発表・交流・評価（批評）から、今後の生活経験やものの見方に生かすことができる。
- (10) 随筆の学び方の一般化・メタ認知することができる。

#### 四 実践の概要

—向田邦子「字のないはがき」（中二）を例に—

##### 1. 児童生徒の実態—何が・どう課題か？—

###### (1) 随筆を読み解き、批評する方法・技術

「これまでの物語・小説と随筆は何がどう違う？」「学んできた読み方は生かせる？」等、随筆のテキスト形式の捉え方や随筆教材特有の読み方（学び方）で困惑したり模索したりする生徒の姿が多く見られる。

###### (2) 言語活動の開発（随筆の創作）と評価観

「随筆をどう書けばいいかわからない」「上手に随筆が書くためには？」等、随筆を創作する方法・技術が理解できていない、創作したものの良さや着眼・工夫点、修正・改善等の観点（「活用」の評価観）が曖昧なままであったりする生徒が少なくない。

###### (3) 自己を語り、生き方や価値観の創造に生かす

「どうして随筆を読まなければならないのか？」等、随筆教材で学んだことを実生活の中に生かし結びつける視点に気付けない生徒が多い。各教科・活動で学んだことを自分の「生き方や考え方・価値観」の創造に生かせるような授業改善・工夫が求められる。

##### 2. 随筆教材「字のないはがき」（向田邦子）が持つ魅力とは何か？

「字のないはがき」は昭和51年に向田邦子によって描かれた文学的随筆である。昭和17年の父からの「手紙」、昭和20年の学童疎開中の妹からの「葉書」という二つのエピソードを通して、「父親の（再）発見」が現在の眼差しから回想形式で描かれている。

向田邦子の随筆の優れた点は、効果的なエピソードの選択と構成、描写力によって、単なる個人の回想・家族の記憶にとどまらない表現の普遍性を持ち得ていることにある。それは、父親や家族のエピソードを通して、向田家の家族が生きた「時代状況や雰囲気（戦

争や国家・制度の様子／時代背景）」が一筆書きのように生き生きと浮かび上がるような表現構造を持っているためである。また、家族や時代を捉える作者の眼差しの鋭さや温かさが、ユーモアと批評精神によって貫かれていることも大きな要因であると考えられる。

##### 3. 学習目標（到達目標）

(1) 随筆の「学び方」を楽しく理解して、自分から進んで読み解こうとする。 【習得型学力1】

(2) 当時の常識的な価値観を正確に理解して、場面構成やエピソードの選択・構成、描写の方法について読み解くことができる。 【習得型学力2】

(3) 「身近な人の（再）発見」をテーマに、随筆の場面構成の「型」を生かして書くことができる。 【活用型学力1】

(4) 互いの随筆を交流・評価（批評）し、自分のものの見方・考え方を見つめ直したり、実生活の中で生かそうとしたりできる。 【活用型学力2】

##### 4. 評価基準のポイント

(1) 随筆教材との魅力的な出会いの場を設定、テキスト形式をイラストで視覚的に理解する等により学びへの関心や意欲を高めようとすることができる。

(2) 省略された作者の生き方や考え方、時代背景・時代の常識的な価値観を正確に理解し、作者のメッセージや構成の工夫、エピソードの選択・構成、描写の方法を正確に・豊かに読み解くことができる。

(3) 「身近な人の（再）発見」をテーマに、随筆の場面構成の「型」（はじめ・なか〈エピソード〉・まとめ）を生かして400字程度で書くことができる。

(4) 創作した随筆を交流・評価（批評）することで、自分のものの見方・考え方を見つめ直したり、生き方・価値観の創造に生かそうとしたりできる。

##### 5. 学習指導計画（詳細は次頁「資料1」を参照）

#### 五 実践の実際

—随筆教材における「習得」から「活用」へ—

##### 1. 基礎・基本学習【習得型学習1】（1時間）

—随筆教材の魅力やテキスト形式を確かめる学習—

導入では作品に興味・関心を持たせ、作者・向田邦子の生涯（生き方）について理解させる。まず「『手紙』と『葉書』の違いは何か？」「『字のないはがき』とはどういう意味か？」と発問。生徒達からは「紙を折るか折らないかだと思う」「簡単に書くか思いを込めて書くかだと思う」等の意見が出された。また、作品のタイトルについては「慌てていて文面を書くのを忘れてしまった葉書」「文字が書けない状況だったけれど、思い出に残っている大切な葉書」等の意見が出された。

次に、写真や年表等を1枚のシート（略）にまとめて向田邦子の生涯について簡単に紹介した。その後、作

品の読み取り後に随筆を書き発表することを伝えた。

本文の音読後、学習シート①(資料2)で随筆のテキスト形式、作品全体の場面構成を確かめた。作者の家族や時代に対する批評精神を正しく読み解くための支援として省略された当時の時代背景や常識的価値観(「昭和10年代の父親像」や「東京大空襲」,「学童疎開」)を写真やグラフ等を提示し簡単に確かめた。

2. 基本学習【習得型学習2】(2時間)

—随筆を楽しく読み解くことから創作に生かす学習—

随筆を「エピソード(場面)単位」で繰り返し読むことで「どんな具体例を選ばよいか」「どのように場面構成を工夫すればよいか」「どのようにしてイメージしたことを表現すればよいか」という学びの方法・技術が理解できるようになる。

学習シート②(資料3)で「エピソード①…幼い邦子にあてた父からの手紙」を読み取る学習を行った。エピソード①では、日常の父親の姿と「手紙」の中の父親の姿を比べながら読み取らせた。また、それぞれの父親の姿を線で引かせたり囲ませたりしながら、描写の書き方(読み方・解釈)を意識できるようにした。学習シート③(資料4)で「エピソード②…学童疎開中の妹からの葉書」を読み取る学習を行った。エピソード②では、父親が疎開する妹に持たせたおびただしい数の葉書の「数・枚数」の意味や「葉書」に象徴され

た妹の状況や変化の過程を詳しく読み取らせた。

描写を確かめた後、その効果について話し合わせた。生徒達からは「○や×だけで妹の様子や変化を表現しているのはすごい」「短い文だけど、こんなにもたくさん内容が詰まっていて当時のことがイメージしやすい」という作者の優れた描写の方法に着目した意見から、「作者は、父親が愛情深かったことを感じていると思うけど、そんな父のことを好きなのか嫌いなのか、その後どうなったかを書かないのいいな」という作者らしいまとめ(考察)の意味に着目した意見、「この文章を読んでみて、自分のお父さんも実は家族のためにいろいろと考えているのかな」「自分にも、家族の存在が大切だなと思った出来事がある。随筆をまとめるときに役立てたい」等、自分の生活経験を振り返り、随筆を書くことに生かそうとする意見等が出された。

3. 発展的学習【活用型学習1】(2時間)

—「身近な人の(再)発見」を随筆でまとめる学習—

本文の読み取り後、「身近な人の(再)発見」をテーマに随筆を創作する学習を行った。まずは学習シート④(略)で構成メモをまとめさせた。誰について・どんな(再)発見を書くのか、何のエピソードをどんな順序で書くのか、どんな会話や行動、情景を描写したり象徴的に描いたりするのか等を、「字のないはがき」

資料1 学習指導計画(7時間完了) —随筆教材における「習得」から「活用」までの学習過程—

段階	時	主な学習内容(活動)	身に付けさせる言語力と指導・支援
基礎的学習1(導入・基礎)	1	1 「手紙」と「葉書」の違いや、ダイアログの意味について考える。 2 作者・向田邦子の生涯(生き方)を理解する。 3 純説・音読練習をする。 4 随筆のテキスト形式を確認する。また、作品全体の場面構成と内容を確認する。 5 省略された「時代背景」や当時の「常識的価値観」を理解する。	1 作品への興味・関心を高めさせる。 2 写真や年表等を簡単に整理したシートを面付けし、視覚的に理解させる。 3 作者シート 4 全文通読後、随筆のテキスト形式をイラスト等で簡単に理解させる。随筆の場面構成の「型」(はじめ・なか・まとめ)を理解させ、おまかな内容をまとめさせる。 —学習シート①— 5 省略された時代背景(東京大空襲、学童疎開)や当時の常識的価値観(昭和10年代の父親像)を、写真やグラフ等で視覚的に理解させる。
基礎的学習2(成長学習)	2	1 「エピソード①」(幼い邦子にあてた父からの手紙)の内容と描写の方法を確認する。 (1) 状況設定を読み取る。 (2) 2つの父親像(「日常の父」と「手紙の中の父」)の違いを読み取る。 (3) 描写の書き方や意味を考える。	1 「エピソード①」の内容と描写の方法を読み解かせる。 —学習シート②— (1) 作者が13歳で初めて親元を離れたとき(高松市)のエピソードであることを正確に理解させる。 (2) 当時の作者から見た父の姿と、大人の作者から見た父の姿を比べながら読み取らせる。また、日常の姿と手紙の中の姿を比べながら読み取らせる。 (3) それぞれの父親の姿(描写)を線で囲ませたり引かせたりしながら、描写の書き方や意味を考えさせる。
基礎的学習3(発展学習)	3	1 「エピソード②」(学童疎開中の妹からの葉書)の内容と描写の方法を読み解く。 (1) 状況設定を理解する。 (2) 学童疎開中の妹の変化を読み取る。 (3) 「葉書」の象徴的な意味や描写の方法を考える。	2 「エピソード②」の内容と描写の方法を読み解かせる。 —学習シート③— (1) 終戦の年の4月に末の妹が学童疎開するとき(甲府市)のエピソードであることを正確に理解させる。また、幼く字が書けない(母)の姿を確認するために葉書を持たせたことを正確に理解させる。 (2) 葉書が送られてきた時期を確認させつつ、その文面(○や×)を書かせることで、疎開中の妹の状況を視覚的に理解させる。 (3) 父親が妹に持たせた葉書の意味や、作者が「葉書」を象徴的に描いた(シンボリック)に描いた意味(象徴的なもの)の書き方を考えさせる。
進歩的学習1(発展的学習)	4	1 「身近な人の(再)発見」をテーマに随筆を書くことを理解し、そのための「構成メモ」をまとめる。 (1) 随筆特有の場面構成の「型」を理解する。 (2) 随筆を書くための基本的情報を「構成メモ」に整理する。	1 身近な人の「(再)発見」をテーマに随筆を書くことを知らせる。観点を提示しながら、「構成メモ」をまとめさせる。 (1) 「はじめ・なか」(エピソード①)・「なか」(エピソード②)・「まとめ」という論理的な文章構成で書くことを理解させる。 (2) 観点を提示したり作品をモデルにさせたりして、随筆を書くための基本的情報を構成メモに整理させる。 ①誰について、どんな(再)発見を書くのか。 ②どんなエピソードを選び、どんな順序で書くのか。 ③どんな会話や行動等を描写したり象徴的に描いたりするか。
進歩的学習2(発展的学習)	5	1 「身近な人の(再)発見」をテーマに随筆を書く。 2 友だちの発表について意見や疑問を持ち、互いの考えを交流する(随筆の内容や表現の方法、技術、発表の仕方等について批評する)。	2 作品をモデルにしたリ構成メモを参考にさせたりしながら、400字程度の随筆を書かせる。—学習シート④— 1 まずはグループ(4人1グループ)で交流させて、次に学級全体(3~4人程度)で発表させる。 2 友だちの発表について字の読み取りや、読み取った内容の発表、自分の生活や人間関係とのかかわりから意見交流(批評)させる。
進歩的学習3(一般化)	7	1 単元全体を通して、身に付けるべき言語力(到達目標)について自己評価し、「わかったこと」や「考えたこと」を振り返る。 2 学級全体で発表し、他教科や実生活等につながる新しい学びの観点を獲得する。	1 評価の観点にしたがって自己評価(◎・○・△)させ、「わかったこと」や「考えたこと」を記述させる。 2 「学習の振り返り」から、他教科や実生活(・社会)につながる観点を、探究型学習につながる観点を意識させる。 —振り返りシート—





をモデルにして簡単にまとめさせた。

次に、前時にまとめた構成メモを生かし、学習シート⑤（資料5）に随筆をまとめさせた。随筆の場面構成の「型」（はじめ・なか①〈エピソード①〉・なか②〈エピソード②〉・まとめ）や描写の方法を生かし、400字程度でまとめさせた。生徒達は、随筆をまとめる段階で「字のないはがき」を繰り返し読み返していた。随筆をまとめることで、作者の情報の選択構成・判断発信の方法を再確認できるとともに、これまでの生活経験や出来事を振り返ることで、身近な人物の大切さについて「(再)発見」したり、それらを自分の生き方や考え方・価値観の形成につなげようとしたりすることができる。

#### 4. 発信・交流学习【活用型学習2】(1.5時間)

—友達の随筆から学びあい批評しあうモデル学習—

まとめた随筆の内容や表現の方法・技術、発表の仕方について、生徒達のよいところを認め合い生かしながら、楽しくかかわりあい批評しあう学習を行った。ここでは、かかわりあいの方法や批評するための観点を全員の生徒達が身に付けられるように、学習シート⑥（資料6、省略）を配布し、活用させた。

生徒A（女子、資料5）は、友だちとコミュニケーションをとることが苦手な人間関係のトラブルをよく引き起こす傾向がある。しかし、随筆の発表を通して「これまでAさんが苦手だったけれど、Aさんの見方が少し変わった」「Aさんが実はものすごく純粋な人で、心が優しいことがわかった」「私もAさんと同じように家で犬を飼っています。年をとって歩くこともままならないけど、私のことを思ってくれているのかも…一緒に過ごせる時間を大切にしたい」等、生徒Aに対するこれまでの見方や考え方に変化が見られた。

また、A自身も随筆を書き発表したことで「自分にとって大切な思い出が、みんなにわかってもらえて嬉しい。これからもマックとのつながりを大切にしていきたい」と、友だちとのつながりやこれからの自分の生き方や考え方・価値観を見つめ直し、実生活（社会）に生かそうとする視点を獲得できた。

#### 5. 評価・一般化学習(0.5時間)

—学びの振り返りから「生き方・価値観」の創造へ—

振り返りシート（資料7、省略）を配布し単元全体の振り返りを行った。①「習得・活用型学習」での到達目標の自己評価、②わかったこと（随筆学習の楽しさや魅力、新しく学んだこと等）、考えてみたこと（随筆を学ぶことの意味、今後の生活や生き方・考え方に生かせる視点等）を記述できるように作成した。

振り返りにより生徒達に「学びの到達度」を確かめさせ、新たな課題意識の発見といった「探究型学力（国語科から他教科への活用、豊かな読書力へ）」につながる視点を獲得させること（メタ認知能力＝自己学習・評価能力の育成）ができる（詳細は「六」を参照）。

## 六 実践の考察

### 1. 「生き方・価値観を創造する」ための評価観6項目

本研究の目的は、随筆教材「字のないはがき」を読み解き、自分の立場や関心等から随筆を創作・評価することを通し、これまでの生活経験や自己の現実・状況と結びつけて批評・創造する学力と言語力を育てることである。生徒の生き方・価値観（表現力）の評価の観点は、以下6項目から見取り、支援し深めることができる。創作した随筆の発表・交流（批評）を通して、友だちの（再）発見や意見の特色、多様なテキスト形式解釈・批評の視点、現実・無意識な感覚と自己を結びつけて新たな発想や認識・価値観の形成に生かすための方法を身に付けさせることができる。

#### (1) 随筆を学ぶことの楽しさ・追究意欲レベル

作者（筆者）らしい感じ方や着眼点、新しいものの見方や考え方の再発見とおもしろさ、作者（筆者）独自の語りや描写力・説明力等を生徒各自の課題意識や生き方、考え方・価値観につなげて考えられたか。

#### (2) 随筆の学び方（習得・活用）の理解レベル

「字のないはがき」のモデル学習（習得）を理解し、随筆教材の読み方（習得・活用・探究）や、自分の立場・関心からの解釈・考察・批評等を、定着させたり発展させたりすることができているか。

#### (3) 語りと描写・象徴的イメージの考察

語り・描写の精粗の区別、エピソードの選択・構成とその工夫・効果、作者（筆者）・語りによるエピソードの考察と意味づけ・批評精神、会話や行動等の心理描写の技術と効果、「葉書」「手紙」、断片的なメッセージ・メモ等の象徴的イメージの意味や効果等。

#### (4) 選択した人物と生き方・価値観・時代背景

「身近な人物の（再）発見」について、だれを・どのような理由で選んでいるのか。また、その人物の生き方や立場・存在、価値観、時代背景のどこにどう関心を持って述べているか等。

#### (5) 自己の生き方・生活経験と結びつけた考察

これまでの生活経験・出来事と自己の生き方、現在の立場や状況等とどう結びつけて解釈・判断・評価しているか。友人関係や家族といった身近な人（もの）と結びつけてまとめられているか等のメタ認知能力。

#### (6) その生徒らしい表現力（着眼点・描写力、要約・キーワード化）—論理的に・個性的に解釈を語る—

(1)～(5)と重なり、評価にあたってはレベルを考える必要がある。①出来事の要約・キーワード化。②語彙力・説明力・表現力。③語りと会話・行動等の描写力。④いつの、だれの、どんな出来事や時代背景、行動・場面に着目しているのか。⑤随筆特有の場面構成の意味を理解し、まとめられているか等。これらに生徒個々の関心、判断の傾向、生活経験、発想、学習意欲等の特色があらわれる。

## 2. 各教科で学んだことを実生活に生かす（実践力）

現在、多くの小中学校・高校では身に付けさせるべき学力観（習得・活用段階）が欠如したまま「言語活動」の拡散する授業、限られた時間数の中で「活用」の学習まで踏み込めない授業、「活用」の評価観が曖昧なままの授業、各教科で学んだことが実生活の中で生かされにくいこと等、実践上の課題や混乱が多い。

本研究では「習得・活用型学力」を明確にした授業開発と評価、国語科における系統的・段階的な授業デザイン、教育技術・指導方法の再考といった観点から行った。結果的には生徒133名（中学2年）のうち89%の生徒達が随筆を書き、自分の生活経験や友だち・人間関係とのかかわりの中で楽しく評価（批評）することができた。

生徒達の学びの振り返りからは「随筆は描写などを使ってエピソードを工夫して伝えるものなんだ／題名の付け方や選んだ人によってイメージが変わり、聞き手の思うことも違うんだ」や「随筆をまとめてみて向田さんの文章の作り方のすごさがわかった／『字のないはがき』はまとめが印象的でうまいと思う」等、随筆の学び方（学力・評価観）や魅力・楽しさ、テキスト形式の解釈・批評を意識した感想が出された。また、「その人を選んだのは何か深い思い入れがあるからなんだと思った／人は見かけによらず、普段とは違った一面があるんだな」や「『エッセイ』って最近よく聞く言葉で、ずっとどういうものだろうと疑問に思ってた…書くのもいいけど、今度はエッセイを読みあさってみようかな／どんな人にも優しい心があるが、恥ずかしくて人に伝えることができない…手紙にのせて伝えるのもいいかな」「僕も周りを見直してみても、別の角度から見てみたいと思うようになった。／改めて思い返してみると、あのときより深く違ったことが思い浮かんでくる／みんなこれからも多くの人たちと出会い、かかわっていく…10年後には私の大切な人も違って見えるのかな／いろんな人の考え方を聞いて、自分の将来を考えてみるのが楽しくなった…ちゃんと進路のこと考え始めないと」等、随筆で学んだことをこれからの生活経験や新しいものの見方・思考方法として生かそうとしたり、他教科や領域等とのかかわりに生かそうとしたりする感想、さらには主体的な進路選択・決定や自分らしい生き方の選択・判断・実践につなげていこうとする感想・意見も出された。

## 3. 多様な「テキスト形式」の解明で系統的・横断的な授業・評価、カリキュラム開発へ

新しい学びや資質・能力に対応すべき教材・ジャンルが現行学習指導要領で示され、教科書教材化されているにもかかわらず、授業実践での課題や混乱が多く見られる。これには、およそ三つの要因がある。

一つには、戦後以降根強く残る形式的な文種観による教材の見方や指導観がある（いわゆる意見文・記録

分・報告文・批評文等の文種別指導の考え方）。また、国語科教育学では、文学的文章と論理的（説明的）文章の二大別からの教材研究が依然として多く、その両者の特性を合わせ持つ活用型（複合型）テキスト形式についての言及や研究、その重要性への指摘も十分に行われていないことが考えられる（注7）。

三つには、現行学習指導要領「解説」（国語科）でも多様なテキスト形式の特性についての言及がやや漠然としたものとなっており、教科書の手引きや指導書等でも指導の方法や系統性等の記述が明らかにされていないことがあげられる（鑑賞・批評、民話・民謡・神話、随筆、伝記・ノンフィクション等）。

「多様なテキスト形式」を解明していくことは、文学的文章や論理的（説明的）文章、伝統的な言語文化教材等（各学年・学校段階における「読むこと」領域）の学びを「系統的に」位置付けたり整理したりすることが可能となる。また、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の三領域で指導・評価すべき学力観と、それらとの関連性が重視された〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕との相互関係や重なりを考慮した「横断的・汎用的」な授業・評価システムの再構築、教科・学校全体のカリキュラムの開発と実践等にも生かしていくことができる。

## 七 おわりに

本稿は、次期学習指導要領・教育課程編成を見据えた新しい国語科授業開発を「字のないはがき」（中学2年）の「習得・活用型」授業モデルと具体的な学習シートを例に実践的に提案した。特に、文部科学省・検討会や国立教育政策研究所によって示された、これからの初等中等教育段階で育成すべき「資質・能力観」（21世紀型能力、批評的・創造的リテラシー）を国語科ではどう育成すべきかという論点も含めている。

現行学習指導要領を受けた小中学校・高校の国語科では、報告（説明）・鑑賞・批評、物語・小説、詩歌俳句、随筆等を正確に読み解き判断し、自分の立場や関心から独自の感覚や感性、分析力（考察・解釈の視点）、論理性等を持って書く学力を、全員の子ども達に系統的に指導・評価することが求められている。

しかし、依然として「多様なテキスト形式」についての言及や研究、その重要性への指摘については不十分である。そのため教育現場では、児童生徒達に批評的・創造的リテラシーや主体的課題解決のための活用する学力（全国学力テストB問題に対応する学力観）を指導し高める重要性は認識しながら、新しく教材化された鑑賞・批評、伝記・ノンフィクション、随筆等への対応が追いついていないような実状にある。

これでは、文部科学省や国立教育政策研究所が検討・議論をすすめている資質・能力観、いわゆる「21



世紀型能力」育成に向けての具体的な授業・評価システム開発、各教科等における系統的・段階的な指導過程（習得・活用・探究）の位置付け、資質・能力観を踏まえた横断的・汎用的なカリキュラム開発といった実践的対応ができていく。

なお、誌面の制約上、生徒達が創作した随筆の分析・考察、抽出児の学びの過程や変化・変容、開発した学習シートの細部に関する詳細と考察については十分には論じられなかった。別稿を期したい。

## 〈注 記〉

- 1 文部科学省・検討会「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会—論点整理—」（2014年3月）。
- 2 国立教育政策研究所「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」（『教育課程の編成に関する基礎的研究（報告書5）』2013年3月）。
- 3 佐藤洋一「言語活動の開発・評価から再構築する『二世紀型の学び・能力』・授業の在り方」（日本言語技術教育学会編・刊『言語技術教育24』2014年8月）。
- 4 現行の学習指導要領（国語科）では、「言語活動例〔書くこと〕」に「経験したこと、想像したことなどを基に、…物語や随筆を書いたりすること（小学校第5・6学年）」、「表現の仕方を工夫して、…物語などを書いたりすること（中学校第2学年）」、「情景や心情の描写を取り入れて、…随筆などを書いたりすること（高校・国語総合）」とある。小・中学から高校までの物語・小説、随筆等の創作と評価（批評）・改善等の指導と評価が系統的に位置付けられた。これは論理的な文章とは異なる表現や発想・認識の方法という「言語力」の育成とともに、21世紀型の学びに求められる「批評的・創造的リテラシー」の育成が全員の子ども達に求められていると読むことができる。
- 5 三浦和尚「27. 随筆、随想、紀行」（日本国語教育学会編『国語教育総合事典』朝倉書店2011年）、大田勝司「随筆・随想」（大槻和夫編『国語科重要用語300の基礎知識』明治図書2001年）、前田眞澄「小学校高学年において随筆・意見文を書かせる際に留意しておきたいこと」（第76回国語教育全国大会・配付資料2013年）等。
- 6 佐藤洋一・有田弘樹「随筆教材のテキスト形式を生かす『習得・活用』『批評』—『自立・協働・創造』につながる授業の開発—」（『愛知教育大学研究報告（教育科学編）第63輯』2014年3月）。
- 7 国語教育研究所編『国語教育研究大辞典』（明治図書1991年7月）、大槻和夫編『国語科重要用語300の基礎知識』（同2001年5月）、日本国語教育学会編『国語教育総合事典』（朝倉書店2011年12月）、他。

## 〈主な参考文献〉

- 1 国立教育政策研究所教育課程センター「平成26年度全国学力・学習状況調査 解説資料（小・中学校国語）」（2014年4月）、水戸部修治編著『小学校国語科学習指導案パーフェクトガイド（全3巻）』（明治図書2014年）他。
- 2 三宅ほなみ監訳（P・グリフィン他編）『21世紀型スキル』（北大路書房2014年）、米国学術研究推進会議編『授業を変え

- る』（同2007年）、松下佳代『〈新しい能力〉は教育を変えるか』（ミネルヴァ書房2010年）、同『パフォーマンス評価』（日本標準ブックレット2007年）、西岡加名恵・田中耕治編著『活用する力』を育てる授業と評価（中学校）』（学事出版2009年）、他。
- 3 佐藤洋一「批評的・創造的な授業開発—テキスト形式に着目した21世紀学習—」（第127回全国大学国語教育学会〈筑波大会〉・研究発表論文集2014年11月）、同『鑑賞・批評・評価する学力と国語科教材開発』（第26回日本教材学会研究発表大会・研究発表論文集2014年10月）、同「学ぶ楽しさ、教える楽しさ」（『教育と医学2014年5月号』慶應義塾大学出版社2014年）、同「全教科・活動の中核としての『国語科習得・活用型学力』の開発と授業—21世紀型スキル（学びと評価のリテラシー）の再構築—」（『国文学言語と文芸第129号』国文学言語と文芸の会2013年）、他。
  - 4 室賀美紀「昔話を読む楽しさを生かす『伝統的な言語文化』の授業開発—教科書教材『ばけくらべ』『茂吉のねこ』の読み方から—」（第77回国語教育全国大会〈小学校中学年・言語文化等〉・発表資料2014年8月）、加藤洋佑「『思考力・判断力・表現力等』を育てる鑑賞文指導—『鳥獣戯画』を読む』『この絵、わたしはこう見る』（小6・光村図書）を例に一」（第76回同大会・発表資料2013年）、松山宜申「国語科古典学習を例にした全教科・活動の中核となる言語力・活動・評価開発—中学校『枕草子』『徒然草』を中心に—」（第75回同大会・発表資料2012年）、他。
  - 5 佐藤洋一「『字のないはがき』の発信学習（上）（下）—エッセイ（随筆）の『学び方』と生きる力—」（『教育科学国語教育』明治図書2001年12月～2002年1月）、同「『随筆』を読む（書く）の習得から活用への評価」（『同臨時増刊』同2010年7月）、左近妙子「随筆を『発信』のために読み解く」（『同』同2003年11月）、蔭山江梨子「文学的随筆（エッセイ）を読む魅力と言語技術」（日本言語技術教育学会編『言語技術教育21』）同2013年3月）、他。
  - 6 吉田精一『随筆入門』（新潮社1965年）、井上俊夫『エッセー・随筆の本格的な書き方』（大阪書籍1988年）。
  - 7 向田邦子『眠る壺』（講談社1982年）、同『父の詫び状』（文藝春秋1981年）、『思い出トラップ』（新潮社1983年）、『男どき女どき』（同1985年）、『向田邦子全対談』（文春文庫1985年）、クロワッサン特別編集『向田邦子を旅する』（マガジンハウス2000年）、他。
  - 8 有田弘樹「『活用力』、『批評的・創造的な学び』に生きて働く言語技術教育を」（日本言語技術教育学会編・刊『言語技術教育24』2014年8月）、同「作品の『テキスト形式』解明による国語科授業開発—『批評的・創造的な言語力』を育てる授業モデル提案—」（国文学言語と文芸の会2013年度大会・研究発表2013年12月）、同「自分の『生き方・考え方』を見つめ直し、実生活につなげようとする生徒の育成—随筆教材の『テキスト形式』を生かした授業づくりと評価を通して—」（愛知国語教育研究会・登壇発表2014年8月）、同「随筆教材の『テキスト形式』に着目した教材研究への視点—『21世紀型学力』の育成に向けた国語科授業開発—」（第125回全国大学国語教育学会〈広島大会〉・研究発表論文集2011年10月）、同「生き方・判断力を鍛える『伝統的な言語文化』授業開発—『平家物語』（中学二年）の『習得・活用（読書レポート）』を例に一」（第123回同〈富山大会〉・発表論文集2012年10月）、他。

（2014年9月17日受理）